

ティピカル プラクティス

遺産と文脈の創造的前進 まちなみの新しさと古さを巡る問題

中島直人 ● 慶應義塾大学専任講師
神吉紀世子 ● 京都大学教授

なかじまなおと

1976年東京都生まれ／東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程 2001年修了／博士（工学）／慶應義塾大学環境情報学部専任講師／著書に「都市美運動」、「都市計画家 石川栄耀」ほか

かんきよこ

1966年大阪府生まれ／京都大学大学院工学研究科建築学第二専攻修士課程 1991年修了／博士（工学）／京都大学大学院工学研究科教授／共著に「未来の景を育てる挑戦」、「生きている文化遺産と観光」ほか

1. はじめに

本稿で扱いたいのは、都市の時間的構成の問題群である。もう少し言い換えてみると、古さの中の新しさ、新しさの中の古さについて、問題提起的に考えてみようということである。

重要伝統的建造物群保存地区制度が制定されてから35年が経つ中で、歴史的な市街地における修景事業の成果は多くの蓄積をみせている。また、近年では、景観法の制定以降、地域の景観やまちなみの文脈を読み込み、周囲との調和を意識しながらコンテクスチュアルにデザインしていくことが、少なくとも都市の目抜き通りや中心部では常識になりつつある。ここでまず、考えたいのは、歴史的なまちなみが残る地区では、新築する場合でも、歴史的な要素を継承することが求められることが多いのであるが、その「継承」という概念が矮小化され、単に「意匠的に似せる・要素を取り入れる」という程度のデザイン・マインドの建物が増えていないかということである。周囲の建物はある時代において最高のデザイン・マインドをもって生み出され、その結果として例えば文化財や景観資源として認知されているわけだが、さて、その間を埋めるように存在する「周囲と合わせた」という建物たちについては、将来、その文化的価値や景観的価値が認められる日がくるのだろうか。これは古さの中の新しさについての問題の一例である。

一方、例えば東京のような大都市の都心部のオフィス街のまちなみは、通常の意味での歴史性をほとんど感じさせない、「四角いビル」が建ち並んだものである。ところどころの街角にかろうじて残る戦前の近代建築はいい味を出していて、それらはできれば将来も残って欲しいと期待をされつつ、多くの場合、所有者の意向次第ですぐにでもなくなっていってしまう危うい存在である。というのが、従来の東京をはじめとする、特に戦災の被害を受けた我が国の主要都市のまちなみに対する典型的な批評であった。しかし、近年、戦後生まれの「四角いビル」たちに懐かしさや、さらに積極的に歴史的価値を見出す感性が育ちつつある。日本建築学会が『日本近代建築総覧』を刊行したのが1980年、それから30年が経ち、「戦前」に限定されていた建築物に対する歴史感覚は、しばらくの間その線とどまっていたと見えるが、近年、急速に1960年代、1970年代へとそのフロンティアの前進が顕在化しつつある。しかし、高

度経済成長期に生み出された建物やまちなみは、その歴史性の認識が広まる前にすでに急速なスピードで失われているのも事実である。ある時代の記憶を宿す建物たちが気づかないうちに、都市から退場しつつある。一見すると、非個性的にうつる戦後の建物にどのように価値を見出し、歴史として成熟させていくのか、そこにどのような文脈を、物語を紡いでみせるのか今この時期に検討する緊急性があろう。これは新しさの中の古さについての問題の一例である。

2. 将来遺産へ向けて新築をつくる

2.1 歴史的まちなみの中で新築をつくる

重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）は、年々選定地区が増し、今では90地区を超える。歴史的まちなみを将来に伝えようとする取り組みが広まる一方、各種の課題も現れている。その一つに、地区によっては、空き家となっている建造物、空き地となっている敷地を相当数含む場合があり、居住者数・世帯数が減少しつつある地区もみられることがある。そもそも地域衰退への危機感から歴史的まちなみの価値を再認識するようになった結果、保存の取り組みが進められている場合もある。こうした場合、当該地区に古くから根付いている伝統的な営みに加えて、新たな居住者、新たな生業をどのように得、新しいものを創っていくかも、まちなみを失わないための重要な取り組みになる。将来に向けてどのように困難な時代を生き抜くか、と保存の延長で考える場合、「新しいもの」が地区の歴史の延長にありつつ、100年後にはそれ自体が「遺産」となっていてほしい、と考えるのは、自然な発想の展開であろう。

一般的に、重伝建地区について制定されている条例等においては、保存物件となる物以外の建物に対しては、保存物件群がつくるまちなみに対して邪魔をしないように一定の外観意匠上の類似・同調が推奨されている。しかし外観意匠の類似・同調、という要請に応える範囲でうみだされる建物は100年後の将来からみて「遺産」になり得るだろうか。今現在の我々が高く評価する歴史的建造物がそうであるように、この現代の地区の自然・社会条件等にある姿勢をもって応答しようとし、短期間ではなく長期間にわたって営みの場となりうる建物を創造する態

度が重要だろう。地区の実際においては、全ての敷地・建物にそうした厳しい態度を求めるのは容易ではないだろうが、「新しいもの」に向けてのマインドとして再確認することが重要ではないだろうか。

重伝建地区の一つである川越に建築された、Fギャラリー(2003年竣工、プロデュース:北山創造研究所、設計:北山孝次郎)の例を、歴史的なまちなみにおける「新しいもの」の創り方への取り組みの一つとして、すでに10年近く前の竣工になるが、改めてここで言及しておきたい。川越一番街は、伝建地区の国庫補助と結びついた修理基準と修景基準に加えて、川越市独自の許可・助成基準としての景観基準、行政による取り組み以前から組織されていた川越町並み委員会が独自の審査基準として設定してきた町づくり規範という四つの基準、規範の組み合わせで、まちなみの保全が担保されているが、その中にあって、Fギャラリーは、二階壁面・屋根の勾配等は周囲の歴史的なまちなみに合わせながら、まずはその素材・材料で現代性、環境性を確保することに努めたものである。見た目の斬新さの一方で、空間構成としては町づくり規範でも指摘されている伝統的な前土間・中庭・通り抜けの構成を継承している。しかし、奥の中庭にはオープンな形式のカフェを設けて、「中庭の賑わい」という、伝統的環境にはなかった新たなアイデアを付加している。このFギャラリーを巡っては、町並み委員会でも喧々諤々の議論が交わされたという。伝建地区を価値付けている「古さ」の中で「新しさ」を創造的に獲得していくためには、厳格なルールの適用やその逆の自由への完全な委託ではなく、将来「遺産」になるような良い建造物を建てようという共通の目標のもとでの、時間をかけた徹底的な協議が必要である。



写真1 川越のFギャラリー正面

空き家や空き地への対策に取り組む場合、こうした公開施設の建物のように周囲への影響が際立つような例のみではなく、小規模な個人住宅が新築されたり、保存物件ではない建物を改装するような周囲への影響は限定的なケースのほうが事例の数

としては多くなるかもしれない。そうした事例においても、いかに「変な目立ち方をしないか」のみがチェックされるのではなく、その建物の存在が、歴史ある地区の中でどのように住まい、まちの環境や営みに関わっていかうと考えて生み出されているか、という積極的な議論がしたい。おそらく実際には、各地の地区の人々はまちづくりとしてそうした議論をしてきているだろう。それを空間として説得力あるかたちに顕在化していくという動きにつなげる工夫がいる。

2.2 時代が重なる・重なっていくまちのオーセンティシティとは

一般論として、新築に大きな価値を与えるときには、将来というまだ見えない環境にむけての真摯な思考が求められることは言うまでもない。価値ある歴史的建造物が、適切な保存策や長い歴史にあってもまだ発揮していないさらなるポテンシャルを十分に考慮されることのないまま、新築に置き換わってしまう例は多々存在する。これまで、そして現在も続く種々の保存活動は、新築に関するディスカッションが決して容易なものではないことを示している。

しかし、実際に過去の数百年から現在、そして将来へ、連続する時代がそれぞれ築いたものが重なって、歴史的なまちなみも形作られている。各時代に一貫して底流する空間性こそがどのような地区にもあるはずの重要な基盤の価値であろう。それをいかに読み解こうとするかが、そのまちのオーセンティシティの最も基盤となる重要部分を紐解くことになるはずだ。ときに破壊をうけ、大胆な創造を行いつつも、しかし連続する時代の中で続いてきたものに学ぶことで、将来を築くためのヒントが十分に与えられる地区、それが歴史的なまちなみであろう。

3. 現代都市・地域を遺産としてみる

3.1 区画整理市街地のまちなみへの眼差し

我が国の20世紀を代表する都市景観として、土地区画整理事業によって生み出された市街地の風景が思い浮かぶ。といっても、その様相はさまざまで、都心から郊外まで、多様な地域で区画整理が展開されてきた。とりわけ、全国的に共通してイメージされるのは、戦後の戦災復興区画整理が生み出した都市景観である。多くの都市では、戦災復興区画整理によってはじめて、本格的な駅前広場やまちの骨格となる広幅員道路などの近代都市に相応しいインフラが整備された一方で、後年の評価では、その設計が全国画一的で、日本の地方の特色を消失させてしまった原因でもあるとの評価がしばしば聞かれる。そして、すでにその着手から60年が経過し、市街地として成熟したところもある一方、特に地方都市では中心市街地の衰退というかたちですでに更新を迫られているところも少なくない。こうした地区の再生を考える際に、当該地区では、戦災復興区画整理によって、それまでの城下町や宿場町以来の歴史的な文脈が全

て断ち切られてしまい、歴史的な資源が殆どないという認識から話が始まりがちだが、戦後「新しく」形成された地区においても、区画整理事業そのものに由来する地区固有の歴史的価値や文脈が確かに存在していることが、戦災復興区画整理についての近年の精力的な研究^{注1)}によって明らかにされつつある。

まず、その市街地への眼差しが刷新されつつあるのは、東京の戦災復興区画整理地区である。そこでは、単調なグリッド街区配置を避けて、区画整理以前の街路網や地形を活かしたり、T字路等を効果的に用いたシークエンス景観を意識した設計がなされたりなど、それぞれの地区で多様な街区配列が試みられており、それが現在のまちなみの「地」を生み出している。また、石川栄耀という稀代のプランナーの指導のもとで、歌舞伎町のコマ劇前広場や麻布十番の広場が生み出された他、更に細かく見ていくと、「広場状空地」と呼べるような街路のふくらみが各所でデザインされている。そして、こうした広場や広場状空地の周囲にはもともと映画館等の繁華街の中心的施設が計画されており、街区設計と土地利用とが一体となった都市デザインが施されていた、その痕跡が今でも残っている。自動車優先の空間設計ではなく、歩行者優先をコンセプトとした空間の再配分が現実化しつつある中で、60年近くも前に設えられた空間が、新たに現代的意義を持って輝き出している。

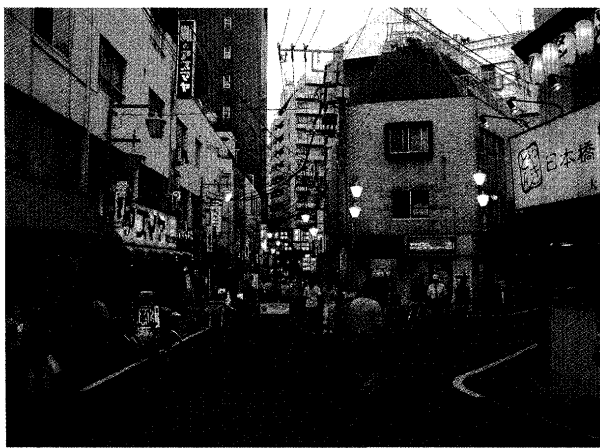


写真2 戦災復興区画整理地区の街並み（豊島区南大塚）

何気ない交差点のようだが、地区の中心となる広場的空間として意図されたものである。

また、東京の戦災復興区画整理地区では、独自の区画整理の設計標準のもと、交差点の隅切りが大きくとられたが、それは当時の担当者である南保賀によれば、交通上の見通し確保というだけでなく、都市の美観に配慮し、交差点自体を広場化するためであったという。その結果、確かに商業地区を中心に、この隅切り線に併せて建物が立ち上がり、かつ、それらがこの隅切り部に入出口を設けるか、そうでなくても交差点に向けた壁面に意匠状の工夫を施すなど「隅切り呼応型建築」とも呼ぶべき建物が建ち並び、基盤と建物とが一体となって特徴的な都

市景観を生み出している。これは、我が国の伝統的なまちなみにおける街路と建物の関係とは異なるが、20世紀の都市計画が生み出した新たな都市建築の類型であり、将来的には、その「交差点を広場化する」というコンセプトの普遍的価値とともに、地域の文脈、遺産として認識される可能性があるだろう。

以上のように、戦後の出発点において創造されたまちなみがようやく歴史的に評価され、地区の将来をつむぐための一つの文脈として捉えることが可能となってきている。



写真3 「隅切り呼応型建築」の例（新宿区鶴巻町）

入口は交差点に面していないが、交差点に向けた表情を意識した意匠が施されている。

3.2 前現代の都市・建築遺産

戦災復興の区画整理は、ある種、戦後に形成されたまちなみの基盤をなすものであり、「隅切り呼応型建築」のような建築タイプ、そしてそれらが連なるまちなみを生み出したのは確かだが、より広い視野で我が国のまちなみを見渡したときに、現在のまちなみの基調となっているのは、「戦後ビル」としか呼びようのない建物たちであろう。それらの多くは、常々保存の対象とされてきたようなランドマーク的な建物と建物との間にある、よく見慣れたものであるが、その歴史的な価値は殆ど議論に上らないような建物である。例えば、近年、話題となった東京丸の内の三菱一号館の復元プロジェクトでは、それ以前に建っていた三つのビルを撤去した上で、復元及び低層棟・高層棟の新設がなされたが、撤去されたビルのうち、戦前に竣工した八重洲ビルについては、その特徴的なアーケードが部分保存というかたちで残されたが、残る二つのビル、高度経済成長期に建設された古河ビルと三菱商事ビルは、痕跡を殆ど残すことなく消えてしまい、今ではどのような姿のビルであったのか、思い出す方が難しい。モダニズムの洗礼を受けて以降のそれらの建物は、意匠的に分かりやすい特徴があるわけでもなく、また、その都市史的な意義も吟味されず、不確かなままである（例えば戦前の様式主義を踏襲した荘厳な銀行建築などは、我が国の近代の物語の中に位置づけることは比較的容易であるのに対

して、これらのビルの歴史的役割はおおよそ自明ではない)。現在、新しく生み出されている建物とはどこか違うか、今まで我々が扱ってきた歴史的な建造物とも違うこうしたまちなみを形成する建物は、「前現代の都市・建築遺産」と捉えることができる。

ここでの「前現代の都市・建築遺産」は、一語で言えば、まだ評価が定まっていない「戦後ビル」のことだが、実はそうしたビルは、学会等での評価など待たずに、特に若い世代の間ですでに熱い注目を浴びている。かつて、ジェーン・ジェイコブスは、都市に多様性と活力をもたらす条件の一つに、「古い建物」を挙げた。特に「たくさんの平凡で目立たない、価値の低い古い建物」こそ、低廉な家賃で新しいアイデアのインキュベーションの役割を果たすとした。今、そうした意味での注目と、高度経済成長期への憧憬とが合わさって、若い世代にとっては生まれる前からあるどこか懐かしさの漂うビルに、ものとしての「古さ」と活用可能性としての「新しさ」を見出している。

これらの「戦後ビル」は、例えば1970年まで存在していた31mの絶対高さ制限下の決まった枠内いっばいに建てられた結果として壁面線が揃うことになった中層ビル、区分所有制度が確立する以前の共同建築で底地の権利関係がそのままビルの内壁にまで反映された防火建築帯など、それぞれの時代のある種の制度的制約や技術的制約の中で立ちあがったものである。従って、例えば後者の防火建築帯のビルは、建設以前の土地所有関係、つまり土地の文脈をその形態に刻印し、現代にまで伝える存在として価値付けることもできる。そうした視点を持ちえたとき、戦後ビルが持つ歴史的な意味やそこで継承されている文脈がはっきりとみえてくるであろう。また、そもそも歴史的価値の評価は、ある歴史の段階での人々の最大限の努力の結果の評価という側面を持つが、ある種の制約の中でこそ人々の普遍的な創造性が発揮されるのではないかと考えさせられるビルも存在する。

いずれにせよ、我が国の現代の都市・建築の殆どは戦後のストックであり、それらの「新しさ」は、それ以前の伝統的な都市・建築との文脈を断って成立したという理解に立脚していたが、そうした文脈の断絶よりも連続や継承を示唆する事実の指摘が増えてきた。また一方で、「新しく」成立したとされる戦後の都市・建築自体が歴史的な文脈を内生させていることにも気が付き始めている。そうした認識によって初めて、私たちは現代の都市・建築の本当の意味での豊かさに触れることができるし、私たち自身が遺産を生み出しつつあることを自覚するのだろう。

4. 多層の文脈とそこに通底する空間性を都市の遺産に

長年にわたる研究や事例ごとに行われる活動を通じて、一定の理解が広がってきた近代以前の建物・まちなみの評価に加えて、前現代の遺産を適切に評価すること、新築に将来への遺産となるべく取り組まれること、が実施に進むのであれば、その

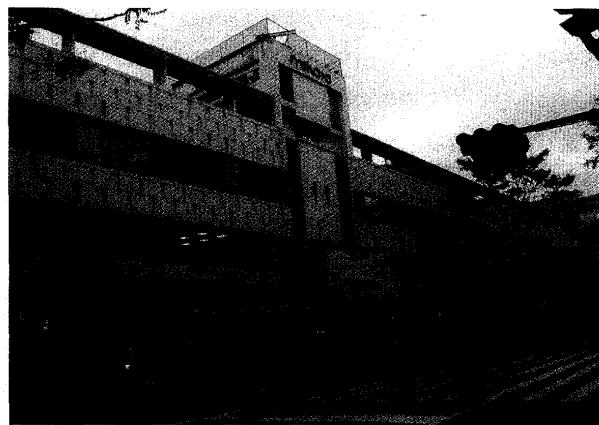


写真4 三笠ビル（横須賀市）

1959年竣工。耐火建築促進法にもとづく防火建築帯として建設された共同ビルであるが、実はかつての商店街の敷地境界がそのまま内壁として維持されている。ビル内部には建設以前からの参道も取り込まれている。

都市の空間を、発展や衰退、再生等のさまざまな営みの時代の残すものが多層に重なる空間として捉えることになる。多層の時代性の間に通底するものとしてのオーセンティシティには、おそらくは、地形・気候などの自然条件とそれに応答する町割り・水利等といったまちの基礎的な空間システムに、時代ごとにまちに関わる人々によって紡がれる営みの物語の蓄積が含まれるとみえる。

ある種の変化や展開があることを前提として、都市の空間を将来「遺産」と評価され得るような空間として受け継いでいこうとすることは、都市の文化的景観を考えることと言える。近年、農山村地域を中心に取組まれ、都市市街地でも設定されている文化的景観の保全の取り組みに際しても、都市の古いもの・新しいものをどのように多層的かつ共存するものとして位置づけていくか、理論的にも実践的にも追及することがさらに求められていくだろう。

注

注1) 近年、西成典久・中島伸・木方十根・浅野純一郎・初田香成らによる戦災復興計画関連の研究結果が次々と上がってきている。

参考文献

- 1) 中島直人・野原卓・中島伸：東京都区部の戦災復興区画整理地区の景観特性の把握 ―一般市街地での住環境向上施策としての景観計画立案に向けて―，住宅総合研究財団研究論文集，住宅総合研究財団，35号，pp.71-82，2009
- 2) 初田香成・中島直人：東京の「戦後ビル遺産」，東京人，都市出版社，277号，pp.132-137，2010
- 3) 日本建築学会編：未来の景を育てる挑戦―地域づくりと文化的景観の保全―，技報堂出版，2011